

巴金『第四病室』論（一） - 観察する眼差しと患者の死 -

著者	近藤 光雄
雑誌名	神田外語大学紀要
号	34
ページ	107-132
発行年	2022-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1092/00001840/

巴金『第四病室』論（一）

——観察する眼差しと患者の死——

近藤 光雄¹

要 旨

1940年代以降、巴金は客体を細かく観察、描写するリアリズムの手法を作品に取り入れた。『兄与弟』、『夫与妻』では、「私」は徐々に対象に接近し、対象が光に照らし出されることで、その姿を捉えることができた。『第四病室』では、陸は客体との距離を縮め、暗闇、患者の存在を排除することで、患者の様子や患部の状態を直視、描写することができた。巴金は客体を透明化する眼差しを陸に与えたわけだが、それは、患者たちの人間関係や治療の様子を観察させ、病院における劣悪な衛生状況、医療体制の不備、患者への暴言、虐待、強制治療などを描かせるためであった。これにより、人間の尊厳への蹂躪を告発し、それを生み出す不条理な社会を批判したのである。

はじめに

1944年5月15日、巴金（1904-2005）は鼻中隔の矯正治療を受けるため貴陽中央病院に入院した。6月中旬に退院するまでの間、まず鼻の手術を受け、それから外科で水腫の手術を受けた。巴金は、入院し手術を受けることを友人に告げず、入籍（1944年5月8日）後間もなく四川に旅立った妻の蕭珊（1917-1972）も傍にいなかった²が、「病床に横たわって身の回りで起こっているあらゆる出来事を

¹ 神田外語大学外国語学部アジア言語学科中国語専攻語学専任講師。

² 『巴金年譜（上、下巻）』（唐金海、張曉雲主編、四川文芸出版社、成都、1989年10月）、610-612頁。

観察し、人々がどのように苦しみ亡くなったかを目にした」³という。このときの体験をもとに書かれた小説が『第四病室』⁴である。

この小説は、友人A君の紹介で巴金と知り合った主人公の陸××⁵なる人物が、胆のう摘出手術を受けるため入院したときに書いた「病中日記」として設定されており、1944年6月1日から18日までの3週間に渡る入院生活と患者たちの闘病生活を記録したものである⁶。先行研究において、『第四病室』は1940年代に発表された『憩園』（1944年）、『寒夜』（1947年）などの文学作品と共にリアリズムの観点から理解されることが多かった。例えば、巴金は所謂「前期」（1920年代末頃から1930年代後半まで）の創作活動のなかでは「革命と理想に身命を捧げた英雄」を描き「強烈な感情の自然な現れ」を重んじ、ロマンティシズムの道を歩んできたが、所謂「後期」（1940年代以降）の創作活動において「どこにでも存在する『小人小事』〔市井の人や日々の出来事〕」に着目し「現実に対する客観的且つ如実な描写」に重きを置くリアリズムの道を歩むに至ったと言われてきた⁷。『第四病室』については、患者への冷遇、治療の放棄、医療体制の不備による患者の死を描くなかで、抗日戦争時期の不条理な社会制度や民衆に強いられた暗黒且つ悲惨な社会生活を暴いた作品として評価された⁸。そのような社会のな

³ 巴金『第四病室』「後記」（1960年2月29日）、『巴金文集』第13卷（人民文学出版社、北京、1961年12月）、426頁。

⁴ 巴金『第四病室』単行本の刊行状況は以下の通り。巴金『第四病室』（「良友文学叢書」新編第3種、良友復興図書印刷公司、重慶、1946年1月）。巴金『第四病室』（「晨光文学叢書」、上海晨光出版公司、1946年11月）。巴金『第四病室』（新文芸出版社、上海、1955年5月）。巴金『第四病室』（『巴金文集』第13卷）。巴金『第四病室』（『巴金全集』第8卷、人民文学出版社、北京、1989年5月）。本稿では良友版に拠り、引用文の直後にその頁数を表記した。

⁵ 良友版、晨光版、新文芸版では「陸××」、文集版、全集版では「陸懷民」。以下、「陸」と略記。

⁶ 陸が巴金に宛てた書簡とされる「前記 1」（1945年2月）によれば、手術を受けた直後に日記は1度途切れ、退院後記憶を辿り不足の部分を補ったが、18日分はあまりにも長いため、10日分（1-4日、7-11日、18日）のみ残し、巴金における「人間性の発掘」に資すべく彼に送った。また、陸宛ての返信とされる「前記 2」（1945年7月）によれば、巴金は陸から送られてきた日記をそのまま出版社に渡し『第四病室』として出版したという。巴金『第四病室』（良友版）、1-6頁参照。

⁷ 李今『「憩園」、『第四病室』、『寒夜』散論』、『瀋陽師範学院社会科学学報』1985年第4期、59頁。

⁸ 郎英俊「悲恨、真摯、深沈、向往——讀『第四病室』隨想」、『中央民族学院学报』1988年「漢語言文学増刊」、67頁。鄒理「傷病生産、中国抗戰时期的医療衛生管理与世界戰時叙事——以巴金的『寒夜』与『第四病室』為例」、『中国比較文学』2020年第4期、143-146頁。

かで生きる人物として、もがき苦しむ患者を寝台に縛りつける用務員の老鄭（抑圧者）、労働災害の治療費を会社に支払ってもらえない第11床（被抑圧者）、同情心を持ち患者に対する不公平な扱いに憤慨する第6床（反抗者）、患者たちの肉体的苦痛や不幸な境遇を嘲笑う第8、9床（太鼓持ち）などが取り上げられた⁹。また、巴金が第8、9床に「看客」（見物人）としての役割を与え国民の奴隷根性を批判したこと、並びに梅毒で入院した第2床や淋病が原因で目の手術を余儀なくされた第12床を描き社会全体の普遍的道徳の低下を批判したことも指摘された¹⁰。そのような病院に勤務する楊木華医師は、曹禺『蛻変』（1940年）に登場する丁医師、丁玲『在医院中時』（1941年）に描かれる助産婦の陸萍と並んで、病院内の腐敗、無秩序、医療制度の不備を前に改革者足り得ぬゆえの挫折感を味わいながらも、暗黒の現実を暴き人々に光明を与える存在として注目された¹¹。

「患者の苦痛を慰めるばかりでなく、精神面でも患者を励まし、可能な限り人間の精神道徳の向上を図る」との人道主義精神を楊木華に与えることで、巴金は「人間性の善良さ、純潔さ、人と人との間の同情、平等、相互扶助」を追い求めたと評された¹²。

かくして『第四病室』は、病院を戦時下の社会に見立て、民衆における抑圧／被抑圧の関係、奴隷根性、道徳の低下を批判し、人間の内部精神の失墜に対する人道主義精神による救済を唱えた作品として評価されてきた。そのような作品のテーマを支える創作方法としてリアリズムの手法が取り入れられたことはすでに指摘されているとはいえ、陸が患者たちにどのような眼差しを注ぎ、入院患者の

⁹ 郎英俊「悲恨、真摯、深沈、向往——読『第四病室』随想」、『中央民族学院学报』1988年「漢語言文学増刊」、67-69頁。李榮秀「『在医院中』、『第四病室』、『蛻変』之比較」、『濟寧学院学报』第28卷第5期（2007年10月）、25-26頁。

¹⁰ 冀衛霞「生存困境中的『一線亮光』——浅析巴金『第四病室』」、『商丘職業技術学院学报』2010年第3期（2010年6月）、69頁。高杉「『病』与『藥』——解讀巴金『第四病室』的一個維度」、『現代語文（學術綜合版）』2014年第6期、65頁。

¹¹ 李榮秀「『在医院中』、『第四病室』、『蛻変』之比較」、『濟寧学院学报』第28卷第5期、27頁。

¹² 冀衛霞「生存困境中的『一線亮光』——浅析巴金『第四病室』」、『商丘職業技術学院学报』2010年第3期、70頁。

いかなる側面を描いたか、その描写がどういった特徴を持ち、いかなる意義を有していたかといった問題は、十分に議論されてきたとは言いがたい。

以上を踏まえ、本稿ではまず、1940年代初期に発表された『小人小事』について考察し、『第四病室』との表現手法の類似点や相違点を明らかにする。その上で、陸による患者の描き方の特徴、並びにそのような設定を施した巴金の意図について検討する。これらの作業を通して、巴金が死にゆく患者の内面をどのように捉え表現したかという問題を考察するための基礎を固めることが本稿の目標である。

一、観察する眼差し

(一) 『小人小事』の場合

1940年代の巴金の作風の変化についてはこれまで頻繁に指摘されてきた。1920、30年代の彼の作品との相違点を巡って、李存光は、「すなわち、いきり立つ反逆者への称揚が世に知られない一般人への関心に変わり、反抗、闘争運動への表現が平凡な生活状況への描写に変わり、[……] 激情の傾注が冷静な叙述に変わった」¹³と述べ、そのメルクマールとなる作品が、1940年代初期に発表された、「小人小事」を題材とする『猪与鶏』、『兄与弟』、『夫与妻』の3篇であると評している。李存光によれば、3篇の短編作品の「どの作品にも『私』が登場する。描かれているのは全て『私』が見聞きした人物と出来事なのだが、『私』は描写される人物や出来事から一定の距離を保っている」¹⁴という。民衆の生活に関心を寄せ、事物や人物の客観的描写を重んじるようになったことが、1940年代の巴金の小説の特徴であると言うのだが、まずは『小人小事』所収『兄与弟』、『夫与妻』を通してその点を確認しておく。

¹³ 李存光『巴金伝』（團結出版社、北京、2018年3月）、187頁。

¹⁴ 李存光『巴金伝』、189頁。

巴金『兄与弟』はある兄弟間の諍いとその弟の事故死を描いた作品である。兄に貸したお金をどうにか取り返そうとする弟の言動が口論の発端となっているが、彼らが路上で言い争っていたとき、「私」は通りに面した 2 階の部屋のなかでそれを聞いているだけだった。その12日後の夜、弟が兄のところから勝手に毛布を持ち出して質に入れたことで再び言い合いになったとき、「私」はしばらく部屋のなかでそれを聞いた後、窓辺に立って外の様子を眺めた。

木造の小屋の前にはまだ 5、6 人いた。小さい声で話をしていたが、そのうち散って行った。残ったのはたった 2 人で、1 人は扉に靠れかかりながら立っており、絶えず頭を横に振っていた。もう 1 人の小柄な男は押し黙ったまま石段の上に立っていた。1 台の人力車が街灯の薄暗い明りを後ろに引きながら、通りの真ん中をゆっくりと通り過ぎて行った。月明りが木造の小屋と扉の前の男をやさしく照らし、灰色の生地 of 長着、面長な痩せた顔、垂れ下がった八字髭の男はまだそこにいたが、彼こそ兄でいるのはごめんだと騒いでいる人だった。私には横に振っている彼の頭は見えたと、彼の顔の表情ははっきり見えなかった¹⁵。

2 階の部屋から観察された光景であるだけに、小屋、人物を含めその場の全体像は描き出されていると言えよう。その反面、「私」とそれぞれの対象との間にある程度の距離があるため、その細部の描写がいくらか欠落しているように思われる。例えば、「私」は八字髭の男の立ち位置や動作、身なりを視野に収めることはできたものの、肝心なその表情を捉えることはできなかった。

ほかの場面ではどうだろうか。この口論から 1 週間ほど経ったある晩、弟の住む木造の小屋が倒壊し、彼はその犠牲となった。コンサートの帰り道にその現場

¹⁵ 巴金『兄与弟——「小人小事」之 2』、『現代文芸』第 6 卷第 1 期（1942 年 10 月 25 日）、巴金『小人小事』、『文学小叢刊』第 3 集、文化生活出版社、上海、1943 年 4 月）、80 頁。

を通りかかった「私」は、立ち止まって傍らからそれを眺めた。

人々は群れをなして私たちの左手側に立ち、みんな坂の下を眺めているようだった。そこではガス灯が淡く光り、騒々しい人声がした。私には多くの影が揺れ動いているようにしか思えず、何もはっきり見えなかった¹⁶。

1 週間前の場面と比較すると、ここでの観察は更に綿密さを欠いている。野次馬に視界を阻まれたせいか、「私」の目には大勢の人の影しか映らず、個人の存在は見えなかった。だが、「私」はすぐに人だかりに歩み寄っていく。

このとき私たちは人込みのなかに分け入り、大通りのわきに立っていた。ガス灯の眩しい光を頼りに、坂の下の木造の小屋が完全に材木の山に変わってしまったのが見えた。人々がその近くで叫んだり、動き回ったり、物を運んでいて、多くの人が1か所にまとまって1本の太い材木を力一杯持ち上げた。ある人が明りを高く掲げ、ほかの人の作業を大声で指揮していた¹⁷。

人々の表情や具体的な救助方法といった細かい点は描写されていないにせよ、光に照らし出された対象に接近したことで、「私」は、材木の山、下敷きになった人を助け出そうとする人々の行動、救助活動を指揮する人間の動作を捉えることができた。対象との距離が縮まったことで、「何もはっきり見えなかった」という「私」の意識も払拭されたはずであろう。

このことは兄に対する「私」の観察についても指摘できる。事故を聞きつけ現場に駆けつけた兄が弟の遺体が安置されている場所に連れて行かれた際、

¹⁶ 巴金『兄与弟——「小人小事」之2』、巴金『小人小事』、82頁。

¹⁷ 巴金『兄与弟——「小人小事」之2』、巴金『小人小事』、83頁。

私の眼差しは彼らの歩調に合わせて崩壊した塀の下までやって来た。そこは光が弱く、人の顔が暗闇に隠れ始めた。私には八字髭の男の顔の表情が見えず、彼が突然前にのめって倒れてしまったところしか見えなかった。足を滑らせ転んでしまったようだ¹⁸。

というのである。ここでは、「私」と兄の距離よりも、光の弱さが観察を阻む要因となっているため、「私」は転倒する兄の姿を捉えることはできても、彼の表情まで確かめることはできなかった。だが、この直後、

八字髭の男は立ち上がると、手のひらでちょっと目を擦って、私の立っている方向に向かって泣き叫ぶように、「あいつ、あいつ本当に死んじまったよ」と言った。ある人が提灯を持ってやって来た。八字髭の男の顔や、目と鼻のあたりに真っ赤な血の跡が付いているのが見えた。その顔は可笑しくもあったが恐ろしくもあった。彼はほとんど無意識に手を動かして自分の肌着を掴んでいた。ボタンはとっくに外れ、黄色い胸は剥き出しだったが、彼は力一杯胸を引っ掻いていた¹⁹。

暗さの問題が解決されたことで、「私」は弟を亡くし悲しみに暮れる兄の姿だけでなく、その表情、身なり、肌の色、胸を引っ掻く動作まで観察することができたのである。

かくして、観察する主体と観察される客体の距離が縮まり、客体が光に照らし出されることで、「私」は対象をはっきり捉えその細部を明確に描き出すことができるようになった。ある場面の全体像を描いた上で様々な細部に焦点化する手法は『小人小事』所収『夫与妻』にも見られる。

¹⁸ 巴金『兄与弟——「小人小事」之2』、巴金『小人小事』、85頁。

¹⁹ 巴金『兄与弟——「小人小事」之2』、巴金『小人小事』、86頁。

巴金『夫与妻』は夫婦喧嘩を題材とした作品である。手紙を寄越した友人たちに返信を認めていた「私」は、外で激しく言い争う男女の声が聞こえてきたため、その様子を見ようと部屋を出た。

ちょうど玄関の真向かいの大通りに人だかりができていた。16、7人といったところか。ぼつぼつと黒い影が見えるだけで、月明りは薄暗く、人々の顔を照らし出すことはできなかった。私は部屋の前の空き地を通り越して大通りのわきまでやって来た²⁰。

人だかりを眺める「私」は正確な人数を把握することも1人ひとりの表情を確認することもできなかったため、更に接近して観察を続けた。

私はスペースを見つけ立ち止まり、目の前の数人の表情を目で捉えた。最初にあの女の黄色く痩せた面長な顔と獅子鼻、それに振り乱した長髪が見えた。彼女はインダンスレン染めの長袖チャイナドレスを身に纏い、襟もとが大きく開いており、白の肌着に覆われた胸が露わになっていた。彼女は腹立たしい様子で腕を組んでそこに立っており、嫌々ながら隣の中年男性の話を聞いていた。中年男性は三角顔で、上が広く下が尖がっていて、唇の周りには短いひげが生えていた。黄色い毛糸のシャツを着て、灰色の洋装ズボンを履いていた。彼は2人を相手に話をしていた。1人は黄色い制服を着た警官、もう1人はどんな身分の間人か分からないが、灰色の中山服を着ているようで、上には黒い生地のコートを羽織っていた。この人は警官より年上だが、まだ30歳前後のようだった。ほかにも数人いて、長着を着た者もいれば短い上着を着た者もいた。自転車を止めて後ろに立っている人もいて、自転車に付いている小さな明りが

²⁰ 巴金『夫与妻——「小人小事」之3』、巴金『小人小事』、96頁。

彼の顔をほかの人よりもはっきりと照らし出していた。彼は若く、傲慢な表情をしていたが、背が少し低かった²¹。

この女と中年男性は夫婦で、妻は夫が不在だった9か月間、1人で仕立屋を切り盛りしてきたにもかかわらず、他所の土地から帰って来た夫がろくに働きもせず暴力を振るうようになったため、口論の末離婚を切り出したのであった。このことはその直後の一連のやり取りから明らかになるが、それはさて置き、『兄与弟』の場合と同様に、『夫与妻』に登場する「私」も客体との距離を縮め、光を頼りに観察することで、この夫婦並びに警官、若者、野次馬の表情、顔色、目鼻立ち、髪型のみならず、服装の生地、色、デザインまで細かく捉えることができるようになったのである。

かくして、巴金の描く観察する「私」は、距離や暗闇といった観察を阻む要素を排除する存在として設定され、対象を直視しその全貌を視野に収めようとする眼差しを与えられていた。対象を透明化するこのような眼差しは、『第四病室』の主人公にも受け継がれているのだろうか。

（二）『第四病室』の場合

『第四病室』の主人公の陸は入院した直後から観察を始めている。6月1日、病室に案内された彼は寝台とその周囲の様子を以下のように描いている。

寝台には白いシーツが敷かれていた。最近洗ったものだが、上にはまだ茶碗の口ほどの黄色い薬品の染みが1つ残っていた。それが私に汪小姐の言葉を思い出させてくれた。寝台は頭側が壁に寄せてあり、左手の間近には第6床、右手のすぐ傍には第4床があったが、間にはそれぞれ1本の通り道があり、互

²¹ 巴金『夫与妻——「小人小事」之3』、巴金『小人小事』、96頁。

いに小さな四角い木の戸棚によって隔てられていた。それは寝台の頭側の漆喰塗りの白い壁に寄せるように置かれていた。左側の戸棚の上には痰壺が2つ、茶瓶が2つあり、その置かれ方から見て、明らかに我々2人が分け合って使うものであったが、第6床の戸棚は鉄のスタンドで占領されていた。四角い戸棚の下側には戸があり、なかは2つに仕切られていた。がら空きだったので私が持って来た衣類を入れることができた。寝台の下には四角い腰掛けが1つあり、上には少し錆びた洩瓶が1つ置かれていた。(3頁)

陸が寝台、戸棚、腰掛けの様子とその位置関係、並びに備えつけの痰壺、茶瓶、洩瓶の数量、状態、置き場所を細かく観察していることが分かる。次に、彼は病室そのものに目を向ける。

[……] それから足元を見ると、それはじめじめとした、真っ黒な、あまり平坦ではない土の地面だった。更に上を見れば、天井板はなく、屋根はかなり高く、両側の壁にはそれぞれ通気用の高窓が2つずつあった。両側の板壁にはそれぞれ上げ下げのできる格子窓が2列ずつあったが、窓の障子紙は破れていた。貼り換えられたことはなく、いまでは雀が出入りする航路となっていた。
[……] (3-4頁)

このように地面、天井、窓を眺め終わると、陸は病室における彼自身と患者たちの位置関係を確認する。

[……] 学生服を脱いできちんと畳んでから、枕の下に敷いて枕をうんと高くした。毛糸のシャツを着たまま蒲団のなかで横になりながら、気ままにあたりの様子を眺めた。病床、患者、見知らぬ顔、珍しい声などが次第に私の注意を引きつけた。私の列には全部で4基の寝台があり、番号は4から7までで

あった。全て頭側が漆喰塗りの白い壁に寄せてあり、第4床と第7床は更に片側が板壁に寄せてあった。私の足元には第12床があり、寝台の頭側が私の足の方に向いていた。その左側にも寝台が1基あり、それが第11床であった。どの寝台の枕元の右側付近にも、物を入れる四角い木の戸棚があった。（4-5頁）

壁に寄せてある第5床を割り当てられた陸は、自身を中心にして、病室の左右と前方の様子を半放射線状に観察できるようになった。彼は寝ながらも周囲を見渡せるよう体勢を整えることで、病室内のあらゆる事物を限なく観察し得る眼差しを獲得したのである。

病床、病室、患者たちとの位置関係などを巡る描写を通して、陸が見ることに強い拘りを持っていたことが見て取れるが、彼が最も観察に力を注いだ対象は患者たちである。例えば、右隣の第4床は6月1日に盲腸の手術を受けた患者だが、その病状を第6床から初めて聞かされると、陸は「右側に顔を向け第4床の患者を眺めた」、そして「蒼白い顔がべったりと敷布団の上に置かれ、目は半開きで、唇は血の気が失せ、ぜいぜいと息を吐いていた」（8頁）患者の姿を目の当たりにした。それから、陸は嘔吐した第4床の「顔が醜いまでに黄色く、唇が苦しうにびくびく動いていた」（15頁）様子や、診察に来た張医師から安静にしているようにと告げられた患者が「はい、はいと答え、目をぱちぱちさせると、下に藁を敷いた敷布団を後頭部で2、3度力強く擦って目蓋を閉じた」（54頁）様子を目にした。6月2日には、「第4床は今日いくらかよくなって、顔の苦痛の表情がだいぶ和らいだ。彼は目を閉じて眠っており、もう枕を使ってもよいことになった」（112頁）こと、半流動食を摂り始めた患者が「1度も吐かなかった」こと、「午後私が昼寝から目が覚め、顔を傾けて彼を見たら、私に微笑み返してくれさえした」（120頁）ことを描いた。このように、陸は第4床の傍から絶えず患者を直視することで、その表情や体調の変化を通して術後の様子を細かく描写し得たのである。

ほかの患者に対してはどうだろうか。6月2日、陸は、担架で病室に運び込まれた老人が第2床の寝台に移された直後の様子をしっかりと捉えている。

〔……〕彼は体を斜めにして寝台に横たわり、私に顔を向けていた。首には包帯が巻かれていて、どうやら首筋に瘡ができていられるらしい。顔色が紙のように真っ白で、両頬が完全に落ち窪み、ほとんど骨と皮しかなかった。唇の周りには全く整えたことのない短い胡麻塩髭が生えていた。口を閉じたままはつきりしない声で呻いており、ときおり目を見開いては力のない眼差しで目の前の風物を眺めた。白目は赤みがかり、目尻には半乾きの目やにが溜まっていて、下の睫毛まで目やにがべっとり付いていた。(103頁)

第4床を描いたときと同様に、陸は老人の痩せこけた顔と苦しそうな表情を細かく描き出している。その患部についても、

〔……〕彼女〔楊医師——筆者〕が彼の首の包帯を解いたとき、私も寝台から起き上がり、首を伸ばしてあの恐ろしい瘡を眺めた。確かに恐ろしい瘡で、首筋全体が爛れて大きな穴となり、うっすら赤いもの、真っ赤なもの、黒いもの、白いものが1か所にねばりつき、どこが肉か肉でないか見分けが付かなかった。見たところ、まるで腐った、虫に食われた桃のようで、桃の種まで剥き出しになっていた。(104頁)

と書いている。瘡の状態を的確に把握し、生々しい描写とリアルな比喻を与えた陸は、恰も老人の傍でその患部を凝視しているかのようである。

だが、果たして陸は第2床の患部の全体像をこれほど鮮明に観察することがで

きたと言えるのだろうか。『第四病室』の手稿²²を確認すると、先の引用文の直後には、「しかし私にははっきりと見えていなかった。彼が私の方に顔を向けて座っていたからだ。私は首を長く伸ばさなければならなかったのだ」²³との補足が書き込まれている。これは、巴金が『第四病室』を執筆した当初、陸が老人からいくらか離れたところから瘡を眺め、患部の状態をはっきりと捉えられていたわけではないことを物語るものである。ところが、この部分は手稿のなかでは巴金の手によって1重線で削除され、良友版にも見られない。言い換えれば、患者との距離、首の瘡の反対側にある患者の顔といった、陸の観察を遮るものを排除し、或いはそのような障害物の存在を読者に気づかせないよう修正することで、巴金は陸に対して、意のままに観察することができるとの意識を持たせ、病室内の物事を隈なく観察し的確に把握し得る眼差しを与えたのである。

このことは第2床を巡るほかの描写に対しても指摘することができる。老人が入院した当日、陸は食事を摂る彼の様子を以下のように描いている。

〔……〕彼は上体を起こし、骨が見えるほど痩せてしまったその手でお碗を持ち、匙でお粥を掬ってゆっくりと口のなかへ運んでいた。手がひどく震えるので、彼は手の代わりに頻繁に顔をお碗に近づけ口で間に合わせた。お粥を1杯食べ終えるのは、彼にとって非常に難儀な作業であった。1口食べると

²² 周立民「『第四病室』手稿積読」（『南京師範大学文學院學報』2020年第2期〔2020年6月〕）によれば、『第四病室』手稿は、上海図書館所蔵、全185頁、2つ折り、片面31.5cm×22cm（高さ×幅）。帳簿用の紙で、片面に10行の縦罫線あり。小説の「前記」並びに「後記」を含まず、第1章から第10章までのみ、欠落頁なし。筆跡は4種類：1、毛筆字で書かれた本文で、削除、書き足し、補足などの修正が見られる。2、備忘録として朱墨で修正したもので、時期は不詳。3、『第四病室』文集版を刊行するにあたり、1960年に作中人物の姓の誤りを修正したもので、3か所のみ。4、1960年代初旬、上海図書館に手稿を寄贈する際、小説の題名、手稿頁数、良友版刊行年月、出版社名を記したもので、本稿では、『第四病室』手稿の複製版である巴金『『第四病室』手稿珍藏本』（華文出版社、北京、2019年8月）を使用し、頁数は手稿に記されているものに拠った。

²³ 巴金『『第四病室』手稿珍藏本』、51頁。原文は、「不過我不能看得很清楚、因為他是臉朝着我這面坐着的。我得把頸項伸得長長的、=越過他的頸=望過去」。2句目の後半に判読不能な箇所があるため、訳出はその直前までに留めた。

に大抵 1、2 度うんうん唸るのであった。彼を眺めていたら私の心まで締めつけられた。(112 頁)

老人の痩せた手の震えや食事の摂りにくさが細かく描かれている部分だが、『第四病室』の手稿を見ると、引用文中の「彼は上体を起こし、骨が見えるほど痩せてしまったその手でお碗を持ち」という部分は、それより先に書かれた「彼は骨が見えるほど痩せてしまったその手で」という内容が 1 重線で削除された直後に書き足されている²⁴。この修正は、陸の観察が患者の僅かな動作まで明確に捉えていることを物語るものと言えよう。そればかりでなく、陸（第 5 床）と老人（第 2 床）の間に第 12 床が挟まれており、3 基の寝台は縦 1 列に配置されている²⁵にもかかわらず、陸はまるで第 12 床に全く遮られることなく、食事を摂る老人の仕草を間近で観察しているかのようである。同じように、6 月 3 日の朝、排便したいという老人のために便器が用意されると、

老人は〔ざら紙を買わなければならないと言われたことに〕返事をする代わりにしゃがみ込んだ。体はぶるぶる震えていた。彼は体を斜めにして横になりたかったようだが、どうしたわけか、体が前にのめって布団の上に倒れ、丸出しのお尻が上に向いた。ひかがみの皮膚は様々な色をしていて、白いところは黴が生えているようで、赤いところは爛れているようで、黄色いところは黒ずんでいた。(124 頁)

というのである。第 2 床との距離や観察を遮るものの存在を感じさせないほど、陸は老人の肉体と動作を具体的に捉えていたのである。

かくして、『兄与弟』、『夫与妻』の「私」と同様に、陸もまた、対象との距離

²⁴ 巴金『「第四病室」手稿珍藏本』、55 頁。

²⁵ 寝台の位置関係については、巴金『第四病室』（良友版）、5、19 頁参照。

を縮め観察の障害物を排除し、対象を徹底的に透明化しその全貌を視野に収めようとする眼差しを与えられていた。いずれの作品にも共通して見られる、主体的に観察し客観的に描写する観察者の姿勢は、客体に対する興味関心に支えられたものと言えようが、反対の角度から見れば、対象の全貌を可能な限り衆目に曝け出そうとする欲望の表れでもあろう。巴金は何故にこのような姿勢を取ったのだろうか。

二、患者の死と医療体制

陸における観察する眼差しを考察するにあたり、前章では患者たちの表情、動作、肉体などの身体的要素に着目したが、ほかには、陸が目を向けた病室内の衛生状況、患者たちの人間関係や治療の様子も注目に値する。巴金はこれらの要素を陸に観察、描写させることにはいかなる意味を持たせたのだろうか。

（一）病室内の衛生状況

6月1日、陸は入院して間もなく、老鄭が患者の排泄物を処理するところを目にし、以下のように描いている。

〔……〕彼は第4床の寝台の足元にバケツを置いてから、第6床と第7床の便器を持って来て、なかの小便をバケツのなかに捨てた。ざあ一つという音がしたので、ハンカチで鼻を覆おうとしたが、にんにくの匂いが混じった尿臭がつんと鼻を突いた。その労働者は便器を元の位置に戻すと、今度は第7床のところまでバケツを持って行き、寝台の足元に置いた。またもや土砂降りの音と臭いがしばらく続いた。〔……〕（9頁）

陸が排泄物処理の様子を細かく描写することができたのは、老鄭が近くで作業を進める最中に排泄物を見、匂いを嗅ぎ、処理の際の音を聞いたからである。どの

患者もこのような経験を持ち得るため、患者たちが決して良好とは言えない衛生環境に身を置いていたことが分かる。

6月2日、陸は痰壺が見当たらないので看護師に持って来てもらおうとした。

〔……〕彼は木製のお盆に乗せていた。お盆はなかなか大きく、大きなコップを10数個から20個ほど乗せることができた。彼はお盆を持って真つすぐ歩いて来ると、各床を回るごとにコップを1つ取ってそこに置いた。私にくれたものは取手がすでに壊れていたもので、昨日使ったのはこのコップではないと分かった。それを取って痰を吐き入れたとき、私は心に不快感を覚えた。もしちゃんと消毒されていなかったら！……と思ったのだ。これは余計な心配に違いない。だが、そう思うと私はますます不安になり、起床したときに使った洗面器のことを思い出した。洗面器は消毒されたこともなければ、水で洗い流されたことすらなく、汚れた水が捨てられるとすぐに新しい水が足されるのだ。もし私が使った洗面器がちょうど目を患ったあの患者が使用したものだとしたら、どういう結果になるのだろうか？…… (91-92頁)

痰壺と洗面器を巡る陸の観察と描写から、個人の日用品に対する病院側の衛生管理が徹底されておらず、個々人の間接的な接触によって媒介される病気に対する感染予防対策も十分に採られていないことが分かる。かくして、陸が対象を直視し客観的に描写することは直接、病室内の劣悪な衛生状況を暴くことを意味したが、これは患者たちの人間関係や治療の様子に対する観察と描写にも当てはまるのだろうか。

(二) 死にゆく第11床

第11床は仕事に火傷を負った患者で、食欲旺盛にもかかわらず排便できず苦しんでいた。6月1日、彼は突然便意を催したので便器を持って来てもらいたい

と大声で老鄭を呼び続けた。それを聞いた看護婦の劉小姐は老鄭を呼びに行ったが、帰って来るなり「老鄭はいなかったわ。すぐ戻って来るから少し待ってて」（30-31 頁）と言った。我慢の限界だった第 11 床は便器を持って来て欲しいと荒々しい声で劉小姐に頼み込んだものの、彼女は不機嫌そうに「老鄭が戻ったら持って来てあげると言ったでしょ。私を呼んだってどうしようもないわ!」（31 頁）と言い、それから大声で喚き続ける第 11 床に対していらいらした様子で「騒がないでと言っているでしょ、ほかの人は静かに療養しないといけないから」（32 頁）と注意した。やがて老鄭が現われ、大声で彼を呼ぶ第 11 床には目もくれず各床を回ってお湯を足していたが、「便器を持って行ってあげなよ」（34-35 頁）と第 9 床に説き伏せられ、漸く嫌々ながら第 11 床に便器を渡した。入院後間もなくこのような場面に遭遇した陸は、「どうして病院内でこんな質の悪いやり口が許されるのか?」（34 頁）と思った。陸は、患者の苦しみを和らげる手助けを積極的に行なうどころか、患者の看護にあたるという任務を放棄しこれを他人に押しつけるという、看護婦としての責任感の欠如、並びにそれを容認する病院の看護体制に強い不満を抱いたようである。

第11床は、排便を促すものとして砂糖と水分を摂取するよう医師から勧められていた。彼はそれを摂っていると言うが依然排便できないため、胡小姐は「お水をたくさん飲まないからでしょ! 言っておきますが、このままではいけません、分かりました?」（47 頁）と言って彼を叱りつけ、張医師も「これからは医者 of 言うことを聞かなくてはなりません、でなければ今度は最低 10 本打ちますから」（48 頁）と彼を脅かした。こうして第 11 床は食塩水の点滴を余儀なくされたが、あまりもの痛みに耐え兼ね点滴を抜いて欲しいと何度も叫び声をあげるので、張医師は、

打ちたくないって? じゃ聞くが、命は惜しくないのかね? あんたには薬を買うお金がない。砂糖を摂りなさいと言っても摂ろうとしないし、水を飲

みなさいと言っても飲まない。会社もお金を持って来てくれない。ここ数日打ってあげている葡萄糖の点滴だって、私が手立てを講じて寄付を募ったものですよ。食塩水は病院で作ったものだから別にお金はかからないのに、打ちたくないと言うのか！ あんたの命を救うのに私だってあれこれ知恵を絞ったのだ。〔……〕 (49 頁)

と愚痴をこぼした。この描写により、看護婦と医師が患者の肉体的、精神的な苦痛を顧みること治療の効果を確かめることもせず、飲水と点滴を唯一の治療方法と見做しこれを患者に強制するという、医療現場の問題が露わになった。

第 11 床は 6 月 2 日にも点滴を 1 度打たれ、翌 3 日には浣腸までされたが、排便困難は一向に改善されなかった。その苦痛は極限に達し、ついには点滴を打って欲しいと苦しそうな声で看護婦や医師を呼んだが、その瞬間、

〔……〕 第 11 床の患者と寝台板と背凭れがもろとも地面に転落した。彼の下半身はシーツにくるまれ、ぼろぼろの中入れ綿が胸あたりまで被さり、剥き出しの両腕が外に現れ、左腕には解けかかった包帯がまだ巻きついていた。頭は寝台板から離れ地面に投げ出され、顔はやはり真ん丸で丈夫なようで、目はぼんやりと開いており、開いた口が相変わらず苦しげな叫び声をあげ続けていた。彼は、自分の寝場所がすでに変わってしまったことが分かっていないようで、転落したときの痛みも感じていないようだった。彼は左手を伸ばして第 9 床の腰掛けの脚を掴もうとした。(140-141 頁)

第 11 床の姿を目にした患者たちは誰も彼を助け起こそうとせず、劉小姐は彼に向って「あんた死にたいのか!」、「その様子じゃ本当に命が惜しくないんだね」(141 頁) と言い、汪小姐も「早く老鄭たちを呼んで来て、担ぎ上げてもらいましょう」(141 頁) と言うだけだった。寝台に担ぎ上げられてからも、第 11 床は

相変わらず猛獣のような叫び声をあげながらもがき続け、その度に寝台板が左に右に激しく揺れた。劉小姐と第9床が患者を寝台に縛りつけるとよいと言うと、

〔……〕寝台板がぐらりと揺れた瞬間、彼〔老鄭——筆者〕はすぐさま患者の片腕、すなわち例の左腕を抑えつけた。そして腕に残っていた包帯でその腕を寝台板——いや、腰掛けの脚と言うべきだが——に縛りつけた。（151-152頁）

老鄭は更に、「もう1本包帯を見つけて来て、右腕もしっかり縛りつけた」上、「これでもう動けなくなった」と確かめ「満足げな表情を顔に浮かべた」（152頁）。第11床が受けた不当な扱いに対して、第6床は「全く人を人とも思っていないのだ」と腹を立て、憎しみに満ちた表情で「彼はお金がないから、みんな彼をばかにする、老鄭でさえ彼をいじめるのだ！」（153頁）と言った。陸も第6床の言葉に対して「こんなのは許せない。患者を平等に扱うべきだ」（153頁）と言って賛同したが、寝台から転落した第11床の様子、患者の容態への周囲の無関心、第11床に吐かれた暴言、患者の肉体に加えられた虐待を直に見聞きした彼にとって、病院はもはや病を治療する場所ではなく、人間の尊厳を踏み躪る場所だったのでないだろうか。

その後も第11床はもがき続け、夜になると「顔色が黒ずんできた。目は微かにではあったが開いていた。口は半開きで、息切れしそうな様子で喚いていた。左腕が外に出ており、肘から先には血の跡がべっとり付いていた」（160頁）。彼の様子を見た陸は、回診に来た張医師に「どうして第11床を何とかしてあげないのですか？」と尋ねたが、張医師は首を横に振って「彼はそろそろおしまいです、これ以上何をしてあげても無駄です」と冷やかに返事しただけで、「その言葉には疲労感しかなく、苦痛や憐憫の念は見当たらなかった」（162頁）。陸が第11床に目を向けると、

〔……〕彼はやはり以前と同じように横たわったまま呻いていたが、声がいづらか低くなり、体もあまり揺らさなくなった。明らかに、抵抗する力がすでになくなってきており、生命も徐々に失われつつあった。(163 頁)

その直後、患者は第 9 床のシーツを力一杯引っ張ったものの、「それ以降、第 11 床は少しも動かなくなってしまった。その叫び声はますます低くなり、やがて微かな息切れに変わり、ついには呼吸の音も消えてしまった」(164 頁)。ここに第 11 床の死の過程が描き出されているが、その死は患者の生が蔑ろにされ、これまで病に対する適切な治療が施されず、死に際の患者に対する救命活動が放棄された結果であろう。第 11 床の呼吸、声、目つき、表情、身振りなどの変化を通して、死にゆく患者の姿をつぶさに捉えた陸の描写は、患者を見殺しにする病院の医療体制を糾弾するものだったのではないだろうか。

(三) 第 6 床の錯乱状態

第 6 床は左腕を骨折した運転手で、6 月 1 日で入院して 1 週間になるが、左腕は相変わらず鉄のスタンドに吊るされたままであった。医師からは全治 2 週間と告げられていたものの、未だにギブスをはめてもらえず、障がいが残るのではないかと恐れていた。また、包帯を替える医師の処置が手荒く常に腕に不快感が残り、回診に来た医師がろくに診察もせずいらした態度を取ってばかりいるので、第 6 床は病院の医療体制に強い不満を持ち転院を望んでいた。6 月 4 日頃から、彼は食欲不振と高熱に見舞われ、6 月 7 日にはマラリアを疑われた。医師の間診を通して、陸は第 6 床が骨折して最初に運び込まれたほかの病院で、一晚中雨漏りのひどい病室に置き去りにされたことを知り、それが高熱の原因ではないかと考えた。第 6 床は高熱で意識がはっきりしないときもあったが、医師たちは誰一人として病名を特定することも治療薬を投与することもできず、発熱した日から彼に大量の水を飲ませ続けた。このように、第 6 床は骨折の治療が放置され

たことで完治への不安と病院への不信感を募らせていたところに原因不明の高熱に襲われ、結局は解熱と称した大量の水分摂取という、第11床と同様の処置を強制されたのである。

6月9日になると、陸は第6床の「顔色が今日一段と黄色くなり、唇が乾燥してひび割れていて」（271頁）、「白目全体が杏色を帯び、目つきが狂気染みており、両目の肉が不自然にびくびく震えている」（272頁）のを見た。看護婦たちが彼の寝台を整え、体を拭いていると、患者はいつもと様子が違うことに気づき、「突然、顔が死灰の色に覆われた」（273頁）。そして、発疹チフスと診断され内科への転科が決まったと説明されても、そのことが理解できず、いよいよ死ぬのだと騒ぎ始めた。見舞いに来ていた友人たちは郭医師に診察を頼んだものの、「彼は私の患者ではない、婦長に聞いて来なさい」ときっぱり断られたので、友人の1人は「自分の患者じゃないからって放って置いてよいのか」（277頁）と不満を漏らした。その後、お金が足りず薬を買えなかった第6床は代わりに食塩水の点滴を打たれ、静かに寝台に横たわっていたが、

〔……〕突然、長い夢から醒めたように元気になり、大声で「どこまで来たんだ？」と言った。

私〔陸——筆者〕はびっくりして、そちらに顔を向けて彼を見た。彼は私が見えていないらしく、両目で前の方をじっと見詰めていたが、私には彼が何を見ているのか分からなかった。真面目臭い様子で「なんで橋が見えないんだろう？」と言うと、「これは五里橋の例の塔ではないか？ あのナンキンハゼの木もあるのか？ 船はまだ岸に着かないのか？ 着いた、着いた！ 岸に上がったぞ！……なんでお袋の姿が見えないんだ？ だだいま！ 朱雲標が帰ったぞ！……おい、なんで俺のことを引っ張るのさ、あっち行け、あっち行けってば！」と続けた。彼は左側に顔を向け、力任せに左腕の包帯を引っ張った。罵りながら狂ったように掴んだり引き千切ったりするので、包帯がか

なり緩んでしまった。手から血が流れていたが、掴んだときに手を切ってしまったらしい。(318頁)

第6床は更に点滴針を抜き包帯を解こうとするので、陸はそれを阻止しようとしたが、「呆然とした、狂気染みた目つき」をした患者は「どけ！ 俺のことを引っ張るな！ 岸に上がらせろ！ 着いた、着いたぞ！」(319頁)と騒いでばかりいた。そこで、老鄭が「1枚の古いシーツを巻いて太い帯にし、第6床と私〔陸——筆者〕の寝台の間にやってくる、有無を言わず第6床の右腕を取って、帯をきりきりと腕に巻きつけた」、それから「その腕を元に戻し、帯を腰掛けの脚にきつく結わえつけた」(321頁)。その直後、第6床は突然真面目な様子で「私奴は無骨者です。近頃陸さんには常々お世話になり、たいへん感謝しております。陸さんにご無礼がありましたら、どうかご寛恕のほどお願い申し上げます」(323頁)と言ったものの、すぐにまた「あんたたち俺を捕まえて牢屋にぶち込む気か！ ここから出せ！ 俺は帰るんだ！ 痛っ！……何としても帰るんだ、引き留められるもんか！ ああ！……痛っ！ お袋！ もう我慢の限界だ！」(324-325頁)と言って泣き喚き続けた。

第6床がこのような錯乱状態に陥ったのは、高熱に襲われ意識がはっきりしない上に点滴まで打たれたからであろう。そもそも病院には治療薬が備蓄されておらず、第6床が十分なお金を持っていたとしても、外部から薬を調達しない限り治療を受けることはできない。薬の代わりに打たれた食塩水の点滴も、発疹チフスに対して何らかの効果を発揮するどころか、患者に苦痛を与えるばかりであった。そこに、患者の容態に対する医師の無関心、もがき苦しむ患者に対する老鄭の虐待といった要因も加わり、第6床の生命力は徐々に奪い去られたのである。

6月10日の午後、第6床は前日に続いて点滴を打たれた。

〔……〕患者の忍耐力は昨日に比べだいぶ弱まっていた。食塩水がほんの

ちょっと入っただけでおんおん泣き出した。しばらく泣いたかと思うと小歌を口遊み始め、飽きるとまた泣き出した。彼は頻繁に左腕の包帯を引っ張り解こうとしただけでなく、掛布団をめくりあげて素っ裸の下半身を露出させた。布団を掛けに来る人もいたが、彼はそれをすぐに撥ね除け、しかもやんちゃな子どものように生殖器をつまんであっちこちに小便をした。〔……〕（336 頁）

そこで、老鄭が昨日よりもきつく第 6 床の右腕を縛りつけたが、点滴が打ち終わっても誰もそれを解いてやらなかった。やがて、第 6 床が排尿したいと喚き出すと、第 8 床は戯けた表情で何か面白いことでもするかのように「お前さんを助けてあげよう」（337 頁）と言って縛めを解いてやり、「お前さん小便がしたいんじゃないの？」（338 頁）と言ってその場で排尿させ、患者に恥をかかせようとした。その晩、第 6 床は同僚たちが届けてくれた薬を投与されたものの、「何度も訝しげな眼差しで彼らを眺め、もう彼らとの友情を忘れてしまったようであった」（341 頁）。その深夜、第 6 床は彼の死後、母親宛てに手紙を書き送って欲しいと陸に頼んだ。陸は彼の言葉を遮ろうとしたが、第 6 床は、

どうかお許してください。明日になればまたぼけ始めるのが怖いのです。いまはとてもはっきりしています。〔……〕ここ数日、僕は高熱ですごく辛かった……僕は何をやらかしてしまい、連中にばかにされ笑いものにされるのか、分からないのです……こんな病気に罹ったのが本当に悔しいです。僕は羞恥心を持たない人間ではないのです。〔……〕（346 頁）

と、はっきりした意識で言い続けた。それから、彼と入籍して間もない妻には再婚して欲しいと一言書き添えるよう陸にお願いをした。それを聞いた陸は、

彼は布団カバーで顔と目を拭いたばかりで、顔には僅かな涙の跡もなかつ

た。その表情を見ると、彼はまるで全てを見透かし開悟したかのようにであった。相変わらず正直で優しい農民の顔だったが、最初に彼に会ったときよりもかなり寝ていた。その目は優しい光を放ち、狂乱の痕跡は露ほどもなかった。彼は頭がはっきりしている、少なくともこのときにははっきりしている、もしかすると私よりもはっきりしているのだ！（348頁）

と考えた。第6床は錯乱状態から回復したかに見えたが、その後誰にも知られることなくいつの間にか静かに息を引き取った。

第6床は、食塩水の点滴を繰り返し打たれた結果錯乱状態に陥り奇怪な行動を取るようになったが、治療薬を投与されたことで正常な精神状態を取り戻し、自身が演じた失態を客観的に捉えることができた。治療と称して行なわれた点滴がいかにか患者の理性を奪い、心身を蝕んできたかが分かるだろう。第6床をからかい醜態を演じさせようとする第8床の行動や老鄭によって繰り返される患者の肉体への虐待も含めて考えると、陸は、一連の出来事をつぶさに観察し克明に記録することで、患者を錯乱状態に追い込む病院の実態と患者たちの抑圧／被抑圧の関係を暴き出し、人間の尊厳への冒瀆を告発したのではないだろうか。

おわりに

本稿では、『第四病室』の主人公の陸による患者の観察と描写の特徴、並びにそのような設定を施した巴金の意図について考察した。1940年代以降の創作活動において、巴金は客体の細部に至るまで観察しそれを具体的に記録するというリアリズムの手法を取り入れた。『小人小事』所収『兄与弟』、『夫与妻』の2篇では、「私」は徐々に対象との距離を縮め、対象が光に照らし出されることで、その姿を明確に捉えることができた。一方の『第四病室』では、観察を阻むような距離、暗闇、ほかの患者の存在を完全に不在なものに見做すことで、主人公の陸は個別の患者やその患部を直視し、描写することができた。このような客体を

透明化する眼差しを巴金は陸に与えたわけだが、それは病室内の衛生状況並びに患者たちが受けた看護や治療の様子を記録させるためであった。苦しみもがいた末に亡くなった第 11 床や錯乱状態と正気の間を彷徨いつつ息を引き取った第 6 床への観察を通して、巴金は陸に、看護婦の暴言、患者に対する虐待、医師の強制治療、患者の容態への無関心、救命活動の放棄などを描き出させた。これにより、巴金は杜撰な医療体制を告発し、人間の尊厳への蹂躪を批判したのである。

『第四病室』を執筆する前、巴金は鼻中隔の矯正治療を受けるため入院したが、自身の入院生活を振り返って「私は、患者がここでどれほどの苦しみに責め苛まれたか、病院関係者がいかにして本来ならば避けることのできる苦しみを患者に与えたかを、この目で直に見たのだ」²⁶と述べている。患者たちがそのような苦痛に苛まれるのは、「不条理な政治制度のもとでは、不条理な社会のなかでは、日々至る所で不条理なことが起きている」²⁷からだとして巴金は指摘するが、そのような実体験を題材に『第四病室』を創作することで、巴金は陸を通して「当時の社会を告発」²⁸したのである。

さて、『第四病室』に登場する楊医師は、これまで、不条理と抑圧に満ちた病院において、患者たちの肉体的な苦痛を和らげ、彼らに精神的な慰めを与える唯一の存在として注目されてきた。「平等、相互扶助」を追い求める巴金の理想の託された人道主義者として評されることもあったが、巴金は彼女に、医療体制の不備にいかに直面させ、患者たちとどのように関わらせたのだろうか。また、巴金は陸に、病に苦しみ死にゆく患者たちや手術する前後の陸自身の内面をどのように描かせたのだろうか。これらの問題は、作品に即して再検討する必要があるため、1930、40 年代に発表されたほかの作家の文学作品とも比較しつつ、改めて考察したい。

²⁶ 巴金「談『第四病室』」（1961 年 10 月 25 日）、『談自己的創作』、『巴金文集』第 14 卷（人民文学出版社、北京、1962 年 8 月）、424 頁。

²⁷ 巴金「談『第四病室』、『談自己的創作』、『巴金文集』第 14 卷、424 頁。

²⁸ 巴金「談『第四病室』、『談自己的創作』、『巴金文集』第 14 卷、422 頁。

参考文献：

巴金『小人小事』（「文学小叢刊」第3集、文化生活出版社、上海、1943年4月）。

巴金『第四病室』（「良友文学叢書」新編第3種、良友復興圖書印刷公司、重慶、1946年1月）。

巴金『第四病室』（「晨光文学叢書」、上海晨光出版公司、1946年11月）。

巴金『第四病室』（新文芸出版社、上海、1955年5月）。

『巴金文集』第13卷（人民文学出版社、北京、1961年12月）。

『巴金文集』第14卷（人民文学出版社、北京、1962年8月）。

『巴金全集』第8卷（人民文学出版社、北京、1989年5月）。

『巴金年譜（上、下卷）』（唐金海、張曉雲主編、四川文芸出版社、成都、1989年10月）。

李存光『巴金伝』（團結出版社、北京、2018年3月）。

巴金『「第四病室」手稿珍藏本』（華文出版社、北京、2019年8月）。